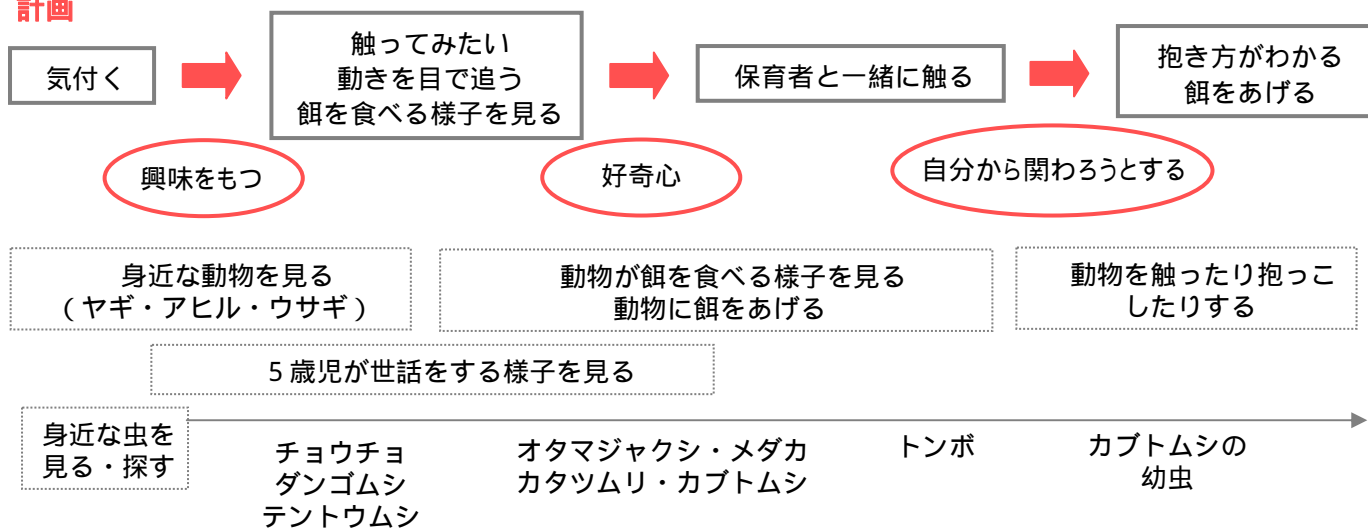


計画



事例

「アヒル見に行こう！」と5・6人の子ども同士で飼育小屋に行くことを楽しんでいた。
 ある日、友達が池の中に餌をこぼしてしまうと、アヒルは池に入り、すごい勢いで餌を食べ始めた。

池に首をつっこみアヒルが忙しく餌を食べる姿を興味深げに見て...



おなか、すいて たんやなあ...

あのご飯、おいしいのかなあ...

先生、ぼくもスイミングで潜れるようになってん。ゴーグルつけるねんで！

でもさ、アヒルさんてゴーグルつけてないけど目痛くないのかなあ...

それは嬉しいね！すごいねC君！アヒルさんと一緒にだね（保育者）

アヒルさん、すごいな！

ことばのたね <http://www.sony-ef.or.jp/preschool/webmagazine/webmag105.html>

保育者の働きかけ・環境構成

生き物をサークルに出したり、飼育ケースに入れたりして目にとまる場所に飼育コーナーを設けることで、子どもたちは生き物の存在に気付き、凝視する。中には触ることに抵抗があり少し離れて見ている子ども、また接し方が分からず乱暴に扱ってしまう子どももいる。しかし、保育者が触れ合ったり餌をあげたりする姿を見ることで、手を差し出したり、接し方がわかり親しみをもってかかわろうとしたりする様子が見られるようになる。



みどころ

生き物とのかかわりを「子どもの経験する内容」に視点を置き、「この時期にはこんな経験をするだろう（して欲しい）」という予測のもとに、年齢に応じた指導の手立てや環境構成を立案されています。こうした計画が、事例に見られるような子どもの気付きや自由な発想を支えるベースになっていると思われます。子どもの経験する内容を捉えるということは、子どもの主体性を大事にした計画につながる考え方であり、子どもの「科学する心」を捉える視点にも通じるものではないでしょうか。